

2026年度入学試験（2月）
大学院デザイン工学研究科

建築学専攻 修士課程
キャリア3年コース

入学試験問題・解答用紙

[小論文]

2026年2月18日（水）
9：30～12：30

<解答要領>

1. 解答は，問題用紙の解答記入欄にすること。
2. 問題用紙（解答用紙）のすべてに，受験番号と氏名を記入すること。また，表紙右下に受験番号・氏名を記入すること。
3. 裏面は使用しないこと。解答用紙配付枚数が不足する場合は，試験監督に申し出ること。
4. 参照・電卓使用はすべて不可とする。
5. 問題用紙（解答用紙）はすべて提出すること。
6. 別途配付する計算用紙は提出不要。

受験番号	
氏名	

2026 年度法政大学大学院デザイン工学研究科入学試験（2 月） 問題・解答用紙

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (1 枚目／4 枚中)	建築学 専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

問いの文章は磯崎新、伊藤ていじ、川上秀光の 3 人による「八田利也」が発表し、当時大きな論争を巻き起こした論文である。

問 1) 次の文章を読み、2026 年現在、建築家が小住宅を設計することについて、あなたの考えを論じなさい。

《諸君。金壺千円也を送金したまえ。どうしたら設計の仕事がとれるか、その秘伝をお教えしよう。電車にタダでのるには——車掌になればよいなどという落し話のたぐいではない。》

てなことになったら、さしあたり、われわれは諸君にたいして、こういう紙きれを一枚密送するであろう。

《小住宅設計をしたまえ。坪四万円、延坪一五坪が標準である。上は坪六万、下は坪二万五千円、延坪というなら九坪から三〇坪まで。もちろん金にはならない。しかしだ。きっと新しいオーナーを開拓するのに役だつであろう。向うのいいなり放題に設計しておけばよい。そういうことは決して恥ずべきことではない。第一建築家に対してわいわい言っている口のうるさい評論家の悪口をかわすことだってできるというものだ。しかも自分の設計方針をおしつけるよりは、そうする方が遙かに小住宅設計のもっとも優れた特色を生かす道だからである。そして小住宅設計家の前途は洋々たるものである。》

現在の小住宅設計というのは、せいぜいそれくらいの利用価値と存在価値しかもっていない。設計対象としての前衛的な歴史的使命はすでにおわってしまった。設計の対象として問題にすべきものは、もうほとんど残っていない。小住宅設計をやっている連中は——やっていた連中は、たいていそう思っているのではないかと思われるふしがある。だからそういう連中はわれわれがこう言ったからといって、ことさら腹をたてることはあるまい。もっとも建築家のなかには、そうじゃないと信じている頼もしい人たちがいるから、話ははずむというものだ。だからわれわれだって書きがよいもあるし、言いがよいもあるというものだ。

(中略)

諸君、われわれは小住宅作家の前途はアンタンたるものであるといったおぼえは一度もない。たしかにわれわれはかつては前衛的と思われていた小住宅設計が、今や壁につきあたっているとはいった。

しかし考えてみるとよい。一定の規模と一定のコストと狭小な敷地とわりの悪い報酬のなかで、新しい家族像をよりどころとして前衛的な小住宅設計を志した建築家たちは、今やその抵抗のよりどころを喪失してしまった。抵抗が少なくなったということは彼らの努力と意図とが空しく地に落ちたからではない。むしろ彼らは輝かしい成功の頂点に立ったのであるとさえいえるではないか。この成功は、あたかもマッチ一本の火によって草原がもえひろがるように、都市住居の形態をかえていった事実を指すものである。一九五〇年には指折り数えるほどしかなかった新しい型の小住宅の数は、一九五八年には何十倍もの数となって、建築家の目のとどかぬ都会の隅々にまで広がっていった。

しかし皮肉なことには、この広がりにはフリーアーキテクトの手をはなれていくという性格をおびていた。フリーアーキテクトの仕事の量は相対的にせばめるという事態をひきおこした。小住宅作家たちは、自分たちの手をはなれた小住宅のデザインが、うまくすりかえられて中間化し情緒化したことを嘆くよりも、むしろ王者の悲哀をこそふかくかみしめた方がよい。諸君は栄光の人である。そしてその諸君が栄光につつまれながらも、誰からも評価されずに飢えとするならば、その飢えこそ諸君の長年の努力にたいする現実のむくいの姿であることを知ればよい。

悲劇の人・小住宅作家たちよ。なげくことはない。どこへ行こうと諸君の網膜には、おびただしい近代小住宅がうつっているではないか。天と地の間に遮るものとてないこの廃墟と田園に、諸君がうみだした型の住宅がえんえんと連なっているではないか。いまや小住宅ばんばんざい。諸君はその大成果に酔う時である。

2026 年度法政大学大学院デザイン工学研究科入学試験（2 月） 問題・解答用紙

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (2 枚目／4 枚中)	建築学 専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

問 1） 解答用紙

出題の意図

建築家が小住宅を設計することについて、その意義や影響を論じる能力を問う問題である。建築家がプライベートな小住宅を手掛ける職能的な意義と大量につくられた小住宅がもたらす影響を批評する出題文に対して、現代的な視点で論述することを求めており、論理的な構成や批評性、的確性を評価する。外国人の受験生には、文章の読解力も求められる。

【解答例】

自由な論点と考察で記述することを意図しているが、解答例としては以下のような論点が想定される。

- ・住空間は建築空間の基本であり、建築家が小住宅を設計することは建築の本質を追求する良い機会となるので、社会背景とは関係なく、時代を超えて建築家が取り組むべき設計テーマである。
- ・建築家は公共空間を手掛ける立場にあり、小住宅は建築の範疇外とも言える。しかし、大量の小住宅が広がり、都市全体に大きな影響を及ぼしてきたため、建築家が未来の小住宅の型を提案することは重要である。特に地球環境への負荷低減を重視した取り組みが不可欠だ。
- ・少子、高齢化社会の到来により、わたしたちの暮らし方や都市の役割が大きく変化している。都市の最小単位となる住空間から都市の再編を構想することは社会的意義が高く、取り組むべき課題も多い。

2026 年度法政大学大学院デザイン工学研究科入学試験（2 月） 問題・解答用紙

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (3 枚目／4 枚中)	建築学 専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

問 2) 次の文章を読み、建築と都市の関係について、建築家の立場からあなたの考えを論じなさい。

都市という怪物がどう発展するかは彼の知ったことではない。一〇年先の都市の姿を知らないということにためらうべきではない。どだい未来の都市における全体像などは、彼の発想法のなかには存在しないのである。

さまざまな人たちが、未来都市のプロジェクトを展開する。都市計画家たちはこのプロジェクトを見て、いかにそれがアウトなものであり、きびしい現実を目をそむけたイーजीゴーイングないい気なものであるかを、数字をもって指摘するだろう。これらのプロジェクトはどう考えてもこれからの都市計画の基本的な哲学となりうるものではない——としよう。

しかし彼は建築家だから、都市計画家たちとは別の発想の仕方をする。すなわち彼はこの荒唐無稽なプロジェクトの存在価値をみとめる。なぜならかかるスケールのプロジェクトこそ建築におけるオリジナリティの根源だからである。したがって彼らの未来都市は、都市の現実と将来にたいして役立つのではなくて、デザインのトレーニングに役立つにすぎないのであるとみなす。折衷主義建築時代にオーダーのトレーニングが設計の基本的要素であったように、現代建築におけるトレーニングの一種は都市的な建築プロジェクトなのである。

とにかく彼にとっては一〇年先の都市がどのように発展しようと、そこで市民がどう生活しようと、それは建築家の責任ではないのである。彼は都市計画にたいしては「あなたまかせ」である。彼がそんなところにまで責任を感じることは僭越というものである。いまだかつて彼はそれほど大きな責任をとらなければならないほど権力も地位もかちえたことはない。また彼がそれほど責任をもって仕事をする機会をもったことはないし、今後もありえない。何よりも彼は都市計画とアーバン・デザインとを区別する。

しかしもっと重要なことは、そういう精神状態からは、設計はできないということである。彼に必要なのは装置か単純なメカニズムだけなのである。真宗のさる高名な上人が「南無阿弥陀仏」といえば衆生は数われるとって人々をひきつけたように、彼に必要なのは都市の未来にたいする詳細な分析とか都市存在の技術手段に関する知識ではなくして、南無阿弥陀仏に相当する哲学=装置だけである。これこそまさに都市計画における建築に値する。

「現代建築家気質」（近代建築 1960 年 6 月号掲載、『復刻版 現代建築愚作論』収録、彰国社）より抜粋

2026 年度法政大学大学院デザイン工学研究科入学試験（2 月） 問題・解答用紙

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (4 枚目／4 枚中)	建築学 専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

問 2） 解答用紙

出題の意図

建築家の作家性を批評する出題文を題材にし、建築家が建築と都市の関係をどのように扱うべきかを論述する問いである。建築学専攻へ進学を希望する受験生が現時点における建築や都市に対する問題意識や関心を整理し、職能的観点も含めて論述する能力とその的確性を評価する問いである。

【解答例】

受験生自身の視点で自由な論述を求める問いなので幅広い解答が想定されるが、以下のような論点や主張が想定される。

- ・建築と都市は異なる学術領域であるが無関係ではない。建築は隣接建物や道路など相互に関係を築きながら街を形成するため、建築と都市は一体的に議論されるべきである。
- ・都市には歴史が蓄積されており、都市から歴史を学び、地域文化を継承する建築を構想することは建築家の責務である。
- ・都市が成長する時代は終わった。縮小社会を前提とし、社会制度、コミュニティ、産業、資源、自然などの包括的な議論のもと、建築と都市を一体的に再構築すべきである。